九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

言いさし表現「けど」の使用実態についての一考察：男女差を中心に

何，潔
Graduate School of Integrated Sciences for Global Society, Kyushu University

https://doi.org/10.15017/1959207

出版情報：地球社会統合科学研究. 9, pp.37-48, 2018-09-25. Graduate School of Integrated Sciences for Global Society, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

『地球社会統合科学研究』9号 37～48
Integrated Sciences for Global Society Studies
No.9 , pp. 37～48

言いさし表現「けど」の使用実態についての一考察
―男女差を中心に―

何（カ）　潔（ケツ）

1．はじめに

日本語は男女における言語使用の違いがある言語である。終助詞は日本語の性差を反映する要素の一つであるが、待遇表現として用いられる文末表現にジェンター差が現れることはこれまでの研究において指摘されてきた。ところが、文末に頻繁に使用されている「けど」に焦点をあて、その使用における男女差について考察された研究は多く見当たらない。

そこで、本稿では、自然談話コーパスを用い、日本語母語話者における同性同士の自然談話データを取り上げ、男女における「けど」の使用実態について、量的および質的に分析することを試みた。さらに、実際の発話文を挙げながら、前後の文脈からその相違点がどのように生み出されるかについて考察し、「けど」文の持つ和らげの発話効果がどのように生じるかを明らかにすることを目的とする。

2．先行研究および本研究の課題

本節では、言いさし表現「けど」に関する先行研究の概観と本研究の研究課題に分けて述べていきたい。

2．1　先行研究

田（2013）は、「言いさし」の「けど」類に焦点を当て、コーパスを用いてその現れ方、特に共起する要素の使用実態について調べた上で、「言いさし」の「けど」類には「主張を和らげる」「相手の反応を引き出す」という二つの発話機能があるとし、その共起する述語の使用実態について考察した。その結果、①「言いさし」の「けど」類が肯定形の「思う」などと共起する場合は、ほとんど意味や主張を述べる場合であり、共起することによって断定を和らげている、②肯定形の「いい」と共起する場合では、相手の反応を引き出そうとしている、③否定形述語「思わない」「よくない」「わからない」「知らない」と更に多く共起するのは、「けど」類の「言いさし」により、話し手の強い断定を表す語気を和らげるためであると述べている。

呉（2013）は、自然談話をデータとして、性別に現れる「けど」の形式と機能に焦点をあて、その使用実態などの様相から、コミュニケーションにおけるポライトネス・ストラテジーを探求し、その使用に潜む話し手の心理について分析を行った。具体的に、「けど」の様相を無標音調タイプと末尾上げタイプに分け、その「けど発話」の性質、「他者発話」の性質、語用論的機能、ポライトネス機能を量的、質的に分析した。その結果として、男性は「末尾上げタイプ」の使用が「無標音調タイプ」よりやや多くなっているが、その差が少ないのに対して、女性は「無標音調タイプ」の方を顕著に用いることがわかった。女性に頻繁に使用される「無標音調タイプ」は他者に共感・理解されたいというポジティブ・フェイスに該当する一方、男性にやや多用される「末尾上げタイプ」は聞き手との間に一定の距離を置くことによって、他者に立ち入られたくないというネガティブ・フェイスを示していることがわかった。

2．2　本研究の課題

① 先行分析では言いさし表現のニュアンスの記述に注目にして検討なされてきたが、共通した論説をまとめてみれば、言いさし表現「けど」で終わる文は聞き手に対して柔らかく持ちかけるような効果が生じるということである。しかし、なぜそのような効果が生じるかという点に焦点を当てて、分析したものは管見の限り少ない。

② 日本語母語話者の言いさし表現「けど」の使用実態に関する研究は、ほぼその現れ方、共起する要素といった側面に焦点を当てて、考察がなされてきたものであり、男女における使用上の相違点を比較対照とする研究は少ない。

3．調査の概要

3．1　分析資料

本稿では、『BTSJによる日本語話し言葉コーパス（トランスクリプト・音声）2011年版』に収録されている日本語母語話者場面における自然談話の中から同性同士の会話を分析資料として取り上げる。男性と女性のデータ数をほぼ同じにするため、女性同士の14会話271分、男性同士の14会話287分の計28会話558分の会話資料をもとに分析を行う。本稿で分析されたデータにおける会話参加者の属性、発話文数、「けど」[1]の使用文数及びその使用頻度を表１にまとめる。

全体的では、分析した28会話に579個の「けど」文が観察された。その男女別の使用数に関しては、男性は347個であり、女性は232個である。なお、男女における

表　会話参加者ごとにおける「けど」の使用数及び使用頻度（男女別）

性別	発話者	発話数	「けど」の使用数	「けど」の使用頻度
男性	M03	364	26	7.14%
	M04	309	27	8.74%
	M05	483	16	3.31%
	M06	472	8	1.69%
	M07	351	16	4.56%
	M08	253	12	4.74%
	M11	348	22	6.32%
	M12	387	10	2.58%
	M15	436	10	2.29%
	M16	365	12	3.29%
	M17	472	15	3.18%
	M18	521	15	2.88%
	JBM01	202	15	7.43%
	JSM02	744	34	4.57%
	JOM02	571	49	8.58%
	JBM02	349	23	6.59%
	JBM03	238	15	6.30%
	JBM04	410	22	5.37%
	小計	7275	347	4.77%
女性	F01	371	4	1.08%
	F02	347	5	1.44%
	F05	367	8	2.18%
	F06	375	16	4.27%
	F07	257	14	5.45%
	F08	245	14	5.71%
	F11	439	7	1.59%
	F12	439	13	2.96%
	F17	255	6	2.35%
	F18	308	16	5.19%
	F19	272	13	4.78%
	F20	246	6	2.44%
	JBF01	359	14	3.90%
	JSF02	734	11	1.50%
	JOF01	803	39	4.86%
	JBF02	351	26	7.41%
	JBF03	265	14	5.28%
	JBF04	349	6	1.72%
	小計	6782	232	3.42%
総計		14057	579	4.12%

使用頻度の有意差をχ^2検定[2]で検定してみると、男性は女性に比べ、会話において「けど」を有意に多く使用していることが認められた〔$\chi^2(1)=14.574$、$p<.01$〕。

３．２　言いさし表現の定義

主節を伴わずに従属節で言い終わっている文は、これまで研究者によって終助詞用法（国立国会研究所1951）、leaving unsaid（水谷1993）、言いさし文（白川1991、佐藤1993）、中途終了型発話文（宇佐美1995）等さまざまな呼び方がされてきた。その定義に関しては、研究者によって異なっており、定まっていない。本稿では、次のような条件を満たすものを言いさし表現とする。

① 形式上、複文の主節を伴わず、文を最後まで言わずに途中で終わっている表現
② 相手の割り込みではなく、話者の意志により最後までは言い切らない表現
③ 統語的に不完全な文であるにもかかわらず、情報伝達において完全文と同じ発話機能を果たしている表現

たとえば、次の例１の「けど」は本研究の定義を満たし、分析対象とするものである。

例文１：

JBI11	あの、ちょっとあの、すごい急で申し訳ないんですけど、お願いが（うん）あって〟
JOK11	うん。
JBI11	あの、明日の午前中って暇ですか？。
JOK11	明日の午前中はバイトがある＜けど…＞|＜|。
JBI11	＜あー＞|＞|、そうなんですか。

（BTSJ コーパスによる例文）

例文１においての「けど」文は話し手が自らの意思で話を途中で止めたものである。また、「明日の午前中はバイトがあるけど」は、接続助詞「けど」で文が終わっており、統語的には完全な文として整った形を取っていないが、JBI11の「明日の午前中って暇ですか」といった質問の応答として、その「けど」の後ろに続く内容が言語化されていないにもかかわらず、その場でのお互いの意思疎通には支障がない様子が前後のコンテクストから観察できる。この例文に現れたような「けど」文を言いさし表現と見なし、本研究の分析対象とする。

４．データの分析

言いさし表現「けど」文の談話機能及び特性分類の基準を明確した上で、それらの分類によって「けど」文を分類し、日本語母語話者と中国人日本語学習者の使用実態について量的に対照分析を行う。

４．１　分類の基準

談話においては、言いさし表現「けど」文がどのような役割を果たしているか、及び話し手の発話意図が「けど」文ですべて言語化されているかによって、二種類の分類方法がある。

４．１．１　談話機能の分類

三原（1995）、白川（1996）、曺（2002）、三枝（2007）の機能分類を参考にし、言いさし表現「けど」の談話機能を「情報提供機能」と「情報要求機能」に分けて、具体的に五つの小場面に分類する[3]。

（１）情報提供機能
　ア．　事実または自分の意見、考えを述べる場合[4]
　イ．　否定の意見を述べる場合
　ウ．　発話の切り出しの場合
　エ．　情報の補足・補正の場合
（２）情報要求機能
　オ．　相手に意見、判断を求める場合

４．１．２　特性分類の基準

朴（2008）は、言いさし表現「けど」の分析において、話し手の発言意図が「けど」の付されている節の内容そのものか、それとも言語化されていない主節かによって、「終助詞的な特性」と「接続助詞的な特性」の二つのタイプに分けている[5]。次に、具体例を通して説明を行う。

タイプ１：終助詞的な特性

このタイプの言いさし表現では、話し手の発話意図は「けど」の付されている節にあると考えられる。「けど」の後続部に何かが続いているとは考えにくく、二つの節を結ぶ接続助詞としては働いていない。この場合の「けど」は終助詞に近いものと見なすことができる（内田2001）。たとえば次に示す例２のような場合である。

例文２：

NNU	えっ、１人っ子？。
BA01	いえ、妹がいます。
BA01	《沈黙２秒》今、高校１年生で。
NNU	うーん。
BA01	家‘うち’はー、後おじいちゃんとおばあちゃんが[↑]（うんー）、一緒に住んでるんですけどね。
NNU	うんー。
NNU	《沈黙２秒》いいですね＜笑い＞、幸せな、家族で＜2人で笑い＞。

この例文では、BA01はNNUに家族情報を質問されることに対し、家族の情報を説明するというのが発話の意図である。BA01は高校生の妹がいるという情報に加え、おじいちゃんとおばあちゃんも一緒に住んでいるという事実を伝達したいだけである。この場合では、「けど」の後続部に何か続いているとは考えにくい。

タイプ２：接続助詞的な特性

このタイプの言いさし表現では、実際の発話は「けど」の付されている節の内容であるが、話し手が伝えようとしているのは言語化されていない主節にあると考えられる。この場合の「けど」は、接続助詞本来の意味を保持した上で、明言化されていない主節の存在とその意味内容を示す役割も果たす（内田2001）。たとえば次に示す例３のような場合である。

例文３：

JF08	だから、なんっていうの ??、夏学期っていうのかな、（うん）前の学期が終わった後に、もう“夏休み中がすごいやぞ”っていう、“夏休み中にやらないとやらないと”っていう（< 笑い >）あれだったけど、実際に入ってみると、全然進めなくて、（< 笑い >）本当に、それぐらい。
JF08	この調子だと、絶対終わらないと思って。
TF08	あらー。
JF08	うーん。
TF08	そうそう、私も結構ペース…、遅れに遅れて < 笑い >[手をたたく]。
JF08	ねー。
JF08	もう、本当やばい…。
TF08	ね。
JF08	< うーん >{<}。
TF08	< だ >{>} ってその、文字化のやつも、本当ははっ、8 月の中旬 ??、（うん）下旬頃、（うん）には絶対終わらなきゃと < 笑いながら > 思ってたんだけど。
JF08	うん。

この例文では、TF08は伝達しようとしている内容が、８月下旬に文字化を終わるという計画ではなく、自分の期待（計画）に反した事実をJF08に伝達したいのである。すなわち、実際に文字化が予定から遅れていることが、言語化されていない主節の内容として推測できる。

4.2　量的分析

４．２．１　談話機能における使用実態

言いさし表現「けど」文を機能別にわけ、男女それぞれの使用数と使用頻度を表２にまとめる。

表２　談話機能における「けど」の使用数及び使用頻度（グループ別）

機能＼グループ		男性 出現数	男性 割合（%）	女性 出現数	女性 割合（%）
情報提供	ア. 事実または自分の意見、考えを述べる場合	222	64.0	134	57.8
	イ. 否定の意見を述べる場合	16	4.6	6	2.6
	ウ. 発話の切り出しの場合	17	4.9	20	8.6
	エ. 情報の補足・補正の場合	89	25.6	62	26.7
情報要求	オ. 相手に意見、判断を求める場合	3	0.9	10	4.3
合計		347	100	232	100

表２の量的分析の結果は、以下のようにまとめられる。

① 全体的にみれば、男性と女性は情報提供機能の「ア．事実または自分の意見、考えを述べる場合」と「エ．情報の補足・補正の場合」に集中しており、85％ほどを占めている。各機能の内訳からみれば、男性と女性の両グループとも、情報提供機能の下位項目である「ア.事実または自分の意見、考えを述べる場合」が圧倒的に多く使われている。

② グループ間における各機能の使用頻度の差からみれば、情報提供機能においては、「ア.事実または自分の意見、考えを述べる場合」の使用は、男性のほうが上回っているのに対し、「エ.情報の補足・補正の場合」の使用は、女性のほうがやや多く用いていることが分かった。その一方、「イ.否定の意見を述べる場合」においては、女性と比べると、男性が2倍ほど多く使用しており、「ウ.発話の切り出しの場合」においては、男性と比べると、女性が2倍ほど多く使用している。情報提供機能の「オ.相手に意見、判断を求める場合」については、女性は4.3％あり、男性はわずか0.9％しかない。

４．２．２　特性分類における使用実態

4.2.1で抽出された「けど」文を特性分類し、男女のそれぞれの使用数と使用頻度を表３にまとめる。

表３に示されているように、全体的にみれば、グループを問わず、「けど」の文は「接続助詞的な特性」より「終助詞的な特性」のほうが使用頻度が高い。各特性の内訳

表３　特性分類における「けど」の使用数及び使用頻度（グループ別）

グループ／特性	男 性		女 性	
	使用数	割合(%)	使用数	割合(%)
終助詞的な特性	320	92.2	201	86.6
接続助詞的な特性	27	7.8	31	13.4
合　　計	347	100	232	100

から見ると、「終助詞的な特性」における使用は、男性は320回であり、全体の92.2％を占めている一方、女性は201回使用し、全体の86.6％を占めている。「接続助詞的な特性」における使用数は、女性は31回であり、全体の13.4％占めている一方、男性は27回使用し、全体の7.8％を占めている。これらの使用数の差は有意であった〔χ^2（１）=4.205、p<.01〕。したがって、男性は女性に比べ、会話においては「終助詞的な特性」を有意に多く使用している一方、「接続助詞的な特性」のほうは女性が有意に多く使用していることが分かった。

４．２．３　談話機能と特性分類の関連性における分析

言いさし表現「けど」文の談話機能を、男女別に分けてそれぞれの使用数及び使用頻度を特性分類別に集計して表４にまとめ、図１にその結果を棒グラフで表示する。

表４　談話機能における「けど」の使用数及び使用頻度（グループ別、特性分類別）

機能	グループ／特性	男 性		女 性	
		終助詞的な特性	接続助詞的な特性	終助詞的な特性	接続助詞的な特性
		使用数	使用数	使用数	使用数
情報提供	ア. 事実または自分の意見、考えを述べる場合	203	19	114	20
情報提供	イ. 否定の意見を述べる場合	11	5	5	1
情報提供	ウ. 発話の切り出しの場合	17	0	20	0
情報提供	エ. 情報の補足・補正の場合	89	0	62	0
情報要求	オ. 相手に意見、判断を求める場合	0	3	0	10
合計		320	27	201	31
		347		232	

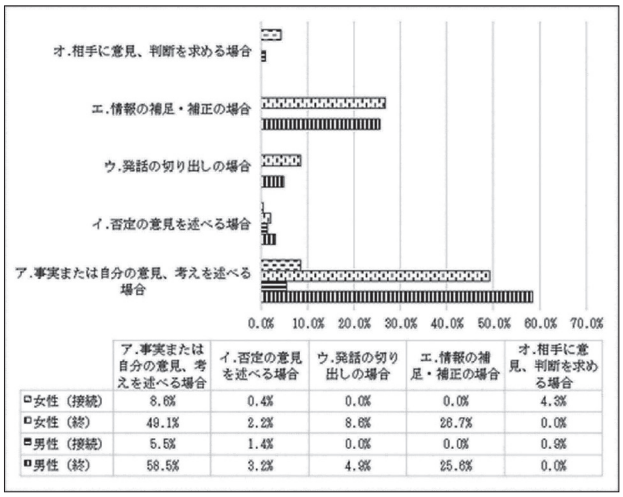

図１　談話機能における「けど」の使用頻度（グループ別、特性分類別）

表４と図１の量的分析の結果は、以下のようにまとめられる。

① 情報提供機能の下位項目である「ア.事実または自分の意見や考えを述べる場合」と「イ.否定的意見を述べる場合」には、グループを問わず、「終助詞的な特性」と「接続助詞的な特性」の両方が見られる。「ア.事実または自分の意見や考えを述べる場合」に関しては、「終助詞的な特性」は女性より男性の方が10％ほど多く用いており、「接続助詞的な特性」は女性のほうが男性の1.75倍多用していることが分かった。さらに、これらの使用数をχ^2検定で検定を行うと、有意性が認められた〔χ^2（１）=2.850,p<.01〕。なお、残差分析の結果、「ア.事実または自分の意見、考えを述べる場合」においては、男性は女性に比べ、会話においては「終助詞的な特性」を有意に多く使用している一方、女性は「接続助詞的な特性」が有意に多く使用していると判断できる。「イ.否定的意見を述べる場合」に関しては、「終助詞的な特性」と「接続助詞的な特性」の両方とも、男性のほうは使用頻度が高いことが分かった。

② 情報提供機能の下位項目である「ウ.発話の切り出しの場合」と「エ.情報の補足・補正の場合」では、両グループとも、「終助詞的な特性」しかみられない一方、情報要求機能の下位項目である「オ.相手に意見、判断を求める場合」では、両グループとも、「接続助詞的な特性」しか用いられないことが分かった。男女における使用頻度に関しては、場面を問わず、男性より女性のほうがより高いことが分かった。

情報提供機能の「ア」における特性分類と機能分類の分析

表２からわかるように、情報提供機能の「ア.事実ま

たは自分の意見、考えを述べる場合」の使用頻度が全体の61.5％を占め、「けど」の五つの機能の中で、もっとも用いられやすい機能だといえる。なお、情報の性質によっては、さらに次の二つに分類できる。

a. 事実を述べる場合（客観的な情報）
b. 自分の意見や考えを述べる場合（主観的な情報）

そこで、情報提供機能の「ア」をグループ別における特性分類ごとの使用数および使用頻度の集計してみると、その結果は以下の表５にまとめられる。さらに、図２に棒グラフで表示する。

表５　機能「ア」における「けど」の使用数及び使用頻度（グループ別、特性分類別）

特性／機能	男 性		女 性	
	終助詞的な特性	接続助詞的な特性	終助詞的な特性	接続助詞的な特性
a. 事実を述べる場合	95	7	54	0
b. 自分の意見、考えを述べる場合	108	12	60	20
小計	203	19	114	20
合計	222		134	

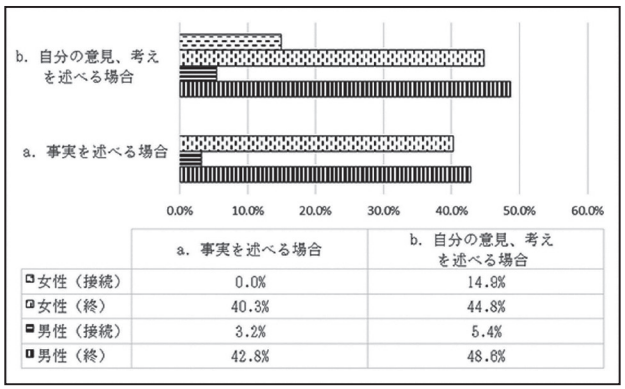

図２　機能「ア」における「けど」の使用頻度（グループ別、特性分類別）

表５と図２からわかるように、男女を問わず、「a. 事実を述べる場合」と「b. 自分の意見や考えを述べる場合」の両方とも、「終助詞的な特性」が「接続助詞的な特性」より多用されている。その一方、「接続助詞的な特性」においては、両グループの間に相違点が見られた。具体的には、「a. 事実を述べる場合」においては、男性の使用のみ見られる。「b. 自分の意見や考えを述べる場合」においては、女性は20回使用し、全体の14.9％占めている一方、男性は12回使用し、全体の5.4％を占めている。

これらの使用数を χ^2 検定で検定してみると、有意差が認められた〔$\chi^2(3)=13.040$、$p<.01$〕。したがって、「a. 事実を述べる場合」においては、男性は女性に比べ、会話においては「接続助詞的な特性」を有意に多く使用している一方、「b. 自分の意見や考えを述べる場合」においては、女性のほうが「接続助詞的な特性」を有意に多く使用しているといえる。つまり、両グループの間における「けど」文の特性の選択には差が現れている。

４．２．４　まとめ

以上の分析から、男女における「けど」文の使用上の相違は、以下の２点にまとめられる。

第一、「終助詞的な特性」に関しては、男性は女性に比べ、会話においてその特性を有意に多く使用している。

第二、「接続助詞的な特性」に関しては、女性は男性より有意に多く使用している。各機能の内訳からみれば、情報提供機能の「a. 事実を述べる場合」においては、男性が女性より「接続助詞的な特性」を有意に多く使用している。一方、情報提供機能の「b. 自分の意見や考えを述べる場合」及び情報要求機能の「オ. 相手に意見、判断を求める場合」においては、女性は男性に比べて、会話において「接続助詞的な特性」を有意に多く使用している。

５　考察

前節では、男性と女性における「けど」の談話機能及び特性分類の使用実態について、量的な対照分析を行った。本節では、コーパスから自然会話文を抽出し、男女の使用実態における相違点について詳しく分析する。

５．１　女性同士の会話文

例文４：

JSF02	< あ >{>} 中国行ったんですか ?。
JBF01	うん、今年の春私も行って（あ）、4 月、10 日くらい行ってたんだけど（うんうん）、上海だけ行って。
JBF01	うん、わりとね、おいしかった。
JSF02	上海ってでもすごい近代的だったんじゃないですか。
JBF01	そう思って、確かにそうだったんだけど。
JBF01	あのね、英語通じると思っていたんだけど〟
JSF02	あー。
JBF01	なのに意外と通じないの（あー）。
JBF01	上海の一番中心の、鉄道の駅のすぐ近くに住んでて（うん）、でもホテルの人はね、なんかこう怪しげな英語しかしゃべれないし（え）、街の人もほとんど英語しゃべれなかった。
JSF02	あー。
JBF01	でも、あーのビジネスマンが集まるような区間があって（あ、うん）、く、地域があって、そこはね結構英語 < 通じた >{<}。

JSF02とJBF01は旅行地である上海について話し合っている。JSF02の「上海がすごい近代的だ」という意見に対し、JBF01は「そう思って、確かにそうだった」と相手の意見に共感を表している。しかしながら、JBF01はその同感を表す意見を「けど」で言いさしており、その「接続助詞的な特性」の意味により、どちらかといえばJSF02の意見に賛成してもよいと思うが、「100％納得しているわけではない」というJBF01の心情がそこに含まれている。JBF01は、JSF02の「上海がすごい近代的だ」という意見に対して「確かにそうだった」といった同感する気持ちを表明した上で、さらに個人の経験で感じた「英語がそれほど通じない」ということを続けて述べた。それが「100％納得していない」といった心情の証だといえるであろう。すなわち、この場面で使用される「けど」は、話し手の考えや意見は聞き手のそれと同じであるということを表しているように見えるが、相手と同調しない考えや意見を持つことが暗に示されているといえる。

言いさし表現「けど」の「接続助詞的な特性」に関しては、「より重要な内容が後件で伝えられること」を予測させる手掛かりであり、話し手が自分の考えや意見を聞き手の考えや意見と対比的に提示するためのデバイスとして使用されていると考えられる（横森・中川2008）。このように、女性は男性より「接続助詞的な特性」の「けど」文を多用しており、聞き手との共感を表すことを重んじており、聞き手の立場をよく考慮して親密感を感じさせる話し方を好んでいる傾向がある。

例文５：

JOF01	友達、決まってない人とか多くないですか？。
JBF02	女の子は多いですね。
JOF01	あ、そうですよね。
JBF02	男の子は結構…（うーん）すぐ決まっちゃうんですけど。
JOF01	あ、そうですか。
JBF02	はい。
JOF01	そっかそっか＝。
JOF01	＝あ、なるほどね。
JOF01	じゃ、やっぱり女の子の方が不利なんですかね。
JBF02	あ、絶対数違いますからね、（あぁー）あの総合職の。
JOF01	確かにそうですね。
JBF02	女性って大体、（うーん）大手企業だと男性対女性で８対２とか<9対１とかじゃないですか？>|<|。
JOF01	<あ、そんなに違うんですか？>|>|。
JOF01	あ、本当に？。
JOF01	そっか。
JBF02	数だけで比べても、（うーん）違いますよね、なんか。
JOF01	そうですよね。
JOF01	私、１番最初は、（はい）あの、それこそ家電メーカーで、（はい）うん、勤務してたんですけど。
JBF02	あ、そうなんですか。
JOF01	うん、10年弱くらいね<笑い>。
JBF02	へぇー。
JOF01	そう、でも、（はい）その時はー、うん…やっぱり景気がよかったからか、すごい大量に採用されてたんですよね（えぇえぇえぇ）、うん。

JOF01とJBF02は就職状況を巡って話し合っている。JBF02は、就職活動において男性のほうはすぐ決まるのに対して、女性のほうは就職率が低いという不利な立場に置かれることを語っている。それに対し、女性であるJOF01は自分の経験を持ち出して当時の女性の就職状況と比較しようとしている。そこで、JOF01は、「家電メーカーで勤務していた」という自分の経験を最初に「けど」文で提示し、その後「10年前に女性が大量に採用されていた」という状況をJBF02に伝える。この場合に用いられる「けど」は、そのあとに続く自分の発言の前提としての機能を果たしており、「けど」節の後でいかなる情報が述べられるかが予測できると考えられる。

このタイプの言いさし表現「けど」は、これから話し手の話の方向性を含ませているという点で、聞き手により配慮した話し方だといえる。例文５のように、聞き手に情報を提供する際に、女性は男性より多く使用している「けど」文が後に続く発話の理解を助ける情報となり、聞き手への心遣いを表す。女性は聞き手により配慮した話し方を好んでいる傾向があるといえる。

例文６：

JSF02	え、フルーツとかはやっぱり„
JBF02	あ、いっぱいありますよ。
JSF02	ねー、<そうですよね>|<|。
JBF02	<安いし>|>|。
JSF02	うんうん。
JSF02	え、なんか私、なんかマレーシアとシンガポールぐらいしかあっちの方だと行ってないからわかんないんですけど、あのーマレーシアとかシンガポールだと、こう、南国系のフルーツがぶわーって（ああー）市場みたいになってて、しかも切り売りとかもしてるって感じのイメージなんですけど。
JBF02	あ、そんな感じですね。
JSF02	あ、やっぱり？。
JSF02	あー。

JSF02	でジュースとか、あ、飲み物とかどうですか?、すごい甘い?。
JBF02	あー、うーんと、まぁもちろん普通の（うんうん）オレンジジュースとかコーラとかソーダとか（うんうん）もあってー、ま、結構でもやっぱり人気があるのはフルーツ〟
JSF02	フレッシュフルーツジュース?。
JBF02	そうそうそうそう。
JSF02	あー。
JBF02	ものすごいおいしくてー。
JSF02	ねー、<そうですよね>{<}。

JSF02とJBF02はベトナムのことについて雑談している。JBF02はベトナムに一年間の留学経験があり、JSF02はベトナムに行ったことがないことが前後の文脈からわかる。JSF02は、ベトナムにフルーツがいっぱいあるという情報をJBF02から確認した上で、マレーシアとシンガポールでは南国系のフルーツが市場で切り売りされているというイメージをJBF02に確認する。そこで、JSF02は自分の発話に「けど」を付け加え、その「接続助詞的な特性」の意味により、同じ東南アジアにあるベトナムの状況がいかなるものであるかを暗示的にJBF02に求めている。

朴（2012）では、話を言い切って自分の意見や考えを明確にさせるよりは、「けど」で終わる言いさし表現を用いることで、相手にturnを譲ったり、相手の意図を伺ったり、あるいは聞き手のためらいの気持ちを表すことで、聞き手の気持ちを探りながら会話を進めていくことが有効であると述べている。例文６のように、女性は男性より「接続助詞的な特性」の「けど」文を有意に多く使用していることにより、文を途中で言いさしながら聞き手を引き込んで、お互いが共同で会話を成功させようという意図が見られる。これは、女性が相手の立場を配慮し、相手との調和を重んじる言語スタイルを好んでいるため、多用されているのではないかと考えられる。

５．２　男性同士の会話文

例文７：

M04	そうそう、そうで思い出したんだけど、わーゆーぜあーが「人名24」さんをはずしたんだよ。
M03	え、歌詞間違えるから?。
M04	うん。
M04	#### はずした。
M03	え、もう間違え、誰がやんの?。
M03	「人名19」さん?。
M04	多分ね。
M03	まーいー、まーまーまーまー、いいと思うけど。
M04	や、怒った、怒ってはずした<笑い>。
M04	はずれてください<笑いながら>。
M03	や、でも、あれは確かにー、まああんまり。
M04	そんなも、歌詞間違っても、あんまりうまくなかったと思う<笑いながら>。
M03	そうかなー。
M03	おれ、うまかったって言っちゃったけど。
M03	それなりじゃん。
M03	でも、聞えてはいたでしょ?。
M04	聞えてはいたけど<ねー…>{<}。
M03	<ばっちり>{>}。
M04	ちょっとおれが欲しい声ではなかった。

M03とM04は「人名24」を「わーゆーぜあー」がはずしたことについて雑談している。「人名24」が歌詞を間違えたために「わーゆーぜあー」がはずしたことに対して、M04は「歌詞間違っても、あんまりうまくなかった」という意見を持っている。しかし、M03は「おれ、うまかったって言っちゃった」と自分が過去にM04の意見と違う内容を発言した事実を述べており、自分の主張を率直に表出する。その一方、M03は違う意見の内容を述べていたことを表明する際に、「けど」文を用いて相手に対する意見を和らげているといえる。

例文８：

JBM01	ええ、今じゃあ、(はい) お宅はその「大学名1」のそばで…?。
JSM02	あ、家ですか?。
JBM01	はい。
JSM02	家は、えーと、「地名1」ってご存知ですか?。
JBM01	はい。
JSM02	あの―、「基地名1」があるんですけど、(ええ) そこから来てまして、はい。
JBM01	「地名1」って…あれは「大学名1」ってどこにあるんでしたっけ?。
JSM02	「大学名1」は「地名2」<なんですけど>{<}、はい。
JBM01	<「地名2」ですよ>{>}=。
JBM01	=また遠くは<ないですか?>{<}<笑い>。
JSM02	<そうですね>{>}、「大学名2」から50分くらいかかりますね、(あー)、やはり、はい。
JBM01	あ、実家なんですか?。
JSM02	実家です（あぁ)、はい。
JBM01	あー、そっかそっか。

JBM01	じゃあ、もう移動が、かなり…。
JSM02	移動…まあ、そうなんですね =。
JSM02	= こう、けっ、…いや、割と時間かかりますよね、ええ、うーん。
JBM01	どうなんでしょうね…、「地名 1」って…いや、行ったことないですけど。
JSM02	あぁー、聞いたことあります ?=。
JBM01	= いや、「基地名 1」とか < 笑い >。
JSM02	あー、そう、そうですよね =。
JSM02	= その辺ぐらいですよね。
JBM01	< 笑いながら > 何があるんだろう ??。

前後の文脈から発話者の基本情報を先に紹介しておく。JBM01とJSM02はJBM01の在籍する大学で録音している。JBM01は「大学名２」から進学してきたが、JSM02は現在「大学名１」に在籍している。JSM02はJBM01に実家が「大学名１」の近くかと聞かれ、それについて説明している。JSM02は実家が「大学名２」から50分ぐらいかかる「地名１」にあり、移動に割と時間かかると考えている。そういう自分の考えを表す発話文の文末に終助詞「よね」を付け加え、JBM01に共感を求めているといえる。それに対して、JBM01は「『地名１』って、行ったことないです」と自らの経験だけを述べているように思われるが、文末に「けど」を付加し、その「接続助詞的な特性」により、「時間かかるかどうかがわからない」という明言化されていない主節を暗示的にJSM02に伝達できる。すなわち、JBM01は「けど」文の「接続助詞的な特性」を用いることにより、自分の考えや意見を聞き手に伝達し、相手と同感できない気持ちを表している。

５．３　まとめ

まず、情報提供機能の「b. 自分の意見、考えを述べる場合」においては、女性は男性より「接続助詞的な特性」の「けど」文を多用し、聞き手との共感を表すことを重んじており、聞き手の立場をよく考慮して親密感を感じさせる話し方を好んでいる傾向があることが観察された。しかしながら、情報提供機能の「a. 事実を述べる場合」においては、男性は「接続助詞的な特性」を女性より多く使用しており、聞き手と違う意見や、聞き手の心情に添わない感想を率直的に表出する。それは、松村（2001：71）がまとめた「女性にとって、会話とは仲間との親しい関係を作り、それを維持するための手段であるため、類似性を強調することで対立はできるだけ避けたり、悩みを打ち明けられたときは同じように悩みを打ち明けて悩みを共有したり、また家族や友人との私的な場面での会話ではよく喋って仲間との親交を深めようとする。一方、男性にとっての会話は、自身の独立を保ちながら、社会階層の中に自分の地位を確立し、それを維持していくための手段であるため、できるだけ大きなグループの公的な場面で自分の意見を主張することを好み、自分の知識や技術を誇示したり、言葉巧みに話をしたり、冗談を言ったり、情報を提示したりして注目の的となろうとする。」といったタネン（1990）の男女の会話のスタイルの相違に合致している。

次、情報要求機能の「オ.相手に意見、判断を求める場合」においては、女性は男性より「接続助詞的な特性」の「けど」文を多く使用していることにより、文を途中で言いさしながら聞き手を引き込んで、お互いが共同で会話を成功させようという話し方を好んでいる傾向がある。

最後、情報提供機能の「ウ.発話の切り出しの場合」は、女性は男性より多く使用しており、聞き手にこれから述べる自分の話に注目する心構えを与え、聞き手への配慮を表している。これにより、女性は聞き手により配慮した話し方を好んでいる傾向があるといえる。

６．おわりに

松村（2001：70）は、タネン（1990）の『You Just Don't Understand: Women and Men in Conversation』で述べている男女の会話のスタイルの違いを以下のようにまとめている。

女性の社会は人と人の繋がりを大切にする社会であり、親しさという概念が鍵となっている。この社会では、個々人が複雑な交友関係網を作り上げ、差異は最小に止め、含意に達しよう努め、違いを強調するような優越性はできるだけ外に出さないようにする。一方、男性社会は地位を重んじる社会であり、独立という概念が鍵となっている。人との結びつきを重んじる女性社会で重要なのは対称性、すなわち人は皆同じであり、お互い同じように親しみを感じているという見方である。一方、地位を重んじる男性社会で重要なのは非対称性、人はそれぞれ異なっており、階級組織の中の異なった地位に位置しているという見方である。

本研究の分析結果から言えば、タネン（1990）の男女の会話スタイルの違いが「けど」文の特性選択に影響を与え、男女における相違点が見られた。

つまり、言いさし表現として用いられる「けど」は、私的な経験や自分の考え、意見を述べる時に多用されており、男女の性別の差異が明確に現れる文末表現「ぞ」「ぜ」「わ」などとは異なるものの、男性は女性より、その表現を用いて自分の考えや意見を主張する傾向にあ

る。その一方、女性は男性より、その表現を使用して聞き手との共感を表したり、聞き手に対する配慮を表したりすることを重んじており、聞き手の立場をよく考慮して親密感を感じさせる話し方を好んでいる傾向にあることがわかった。

7．今後の課題

本稿では、『BTSJによる日本語話し言葉コーパス（トランスクリプト・音声）2011年版』を用いた文字面の研究としては、不十分なところがある。このコーパスはほぼ20代の学生を調査対象とし、全年齢層をカバーしているわけではないので、職場の会話及び40代～60代の中高年齢層の使用実態への考察が不十分である。次に、コーパスは初対面と友人同士の雑談が中心となっており、発話場面や発話内容が限られているため、考察された使用実態の傾向が偏っている恐れがある。従って、より多様なデータを収集し、さらに分析を行う必要がある。

---

[1] 言いさし表現に関する先行研究では、「けど」「けれど」「けども」「けれども」の表記が見られる。これらの表記には丁寧さなどの待遇表現的な違いがあることは認められるが、意味的に近いものであると考えられる。また、コーパスを調べた結果、「けど」で言いさす文がほとんどであることから、本研究では、「けど」で表記を統一する。つまり、本研究で扱う「けど」には「けど」「けれど」「けども」「けれども」が含まれる。

[2] χ^2検定、またはカイ二乗検定とは、帰無仮説が正しければ検定統計量が漸近的にカイ二乗分布に従うような統計学的検定法の総称である。
χ^2検定ツール：http://www.kisnet.or.jp/nappa/software/star/freq/chisq_ixj.htm（2017年12月）

[3] 先行研究で分類されている「誘いや申し出などの働きかけをする」といった行為要求の機能が本研究に用いられるコーパスでは観察されていないため、分類に入れないこととする。

[4] この機能における意見や考えは、肯定的なものを指す。

[5] 朴（2008）の分類では、「終助詞としての機能」と「接続助詞としての機能」と呼ばれる。この名称は、終助詞と接続助詞それぞれの特徴を直感的に理解しやすい点で優れている。 しかし、機能の名称が入ってしまう点は本研究の談話機能と混乱させる可能性があり、適 切ではないため、本研究では、「終助詞的な特性」と「接続助詞的な特性」の表現を用いる。

参考文献

Deborah Tannen（1990）, *You Just Don't Understand: Women and Men in Conversation,* New York

石黒圭（2014）「講義の談話における『が』『けれども』の用法」『一橋大学国際教育センタ紀要』第5号 ,pp.3-15

宇佐美まゆみ（1995）「談話レベルから見た敬語使用―スピ-チレベルシフト生起の条件と機能―」『学苑』第662号 ,pp.27-42

宇佐美まゆみ（2007）「改訂版：基本的な文字化の原則（Basic Transcription System for Japanese:BTSJ）2007年3月31日改訂版」『談話研究と日本語教育の有機的統合のための基礎的研究とマルチメディア教材の試作』平成15-18年度 科学研究費補助金基盤研究B（2）（課題番号15320064）研究成果報告書

内田安伊子（2001）「『けど』で終わる文についての一考察―談話機能の視点から―」『日本語教育』第109号 , pp.40-49

岡田安代（1991）「日本人は、なぜ文末まで言わないのか？―会話を成り立たせる『共話』の原理―」『月刊日本語』第4号第1巻 ,pp.9-13

荻原稚佳子（2012）「日本語自由会話における『言いさし』使用と解釈の難しさ―中国語母語話者の場合―」『明海大学外国語学部論集』第24集 ,pp.17-33

吳秦芳（2013）「話し言葉における『けど』の考察 -『形式』、『語用論的機能』、『ポライトネス機能』に注目して」『台灣日本語文學報』第34号 ,pp.279-303

国語学会編（1980）『国語学大辞典』東京堂出版

国立国語研究所（1951）『現代語の助詞・助動詞―用法と実例―』秀英出版

国立国語研究所（1960）『話しことばの文型（1）―対話資料による研究―』秀英出版

三枝令子（2007）「話し言葉における『が』『けど』類の用法」『一橋大学留学生センタ-紀要』第10号 ,pp.11-27

佐藤勢紀子（1993）「言いさし『・・・が / けど』の機能―ビデオ教材の分析を通じて―」『東北大学留学生センタ-紀要』第1号 ,pp.39-48

白川博之（1991）「『カラ』で言いさす文」『広島大学教育学部紀要　第2部』第39号 ,pp.249-255

白川博之（1996）「『けど』で言い終わる文」『広島大学日本語教育学科紀要』第6号 ,pp.9-17

白川博之（2009）『「言いさし文」の研究』 くろしお出版

高橋太郎（1993）「省略によってできた述語形式」『日本語学』第12巻10号 ,pp.18-25

田昊（2013）「「言いさし」の「けど」類の使用実態に関する一考察」『日本語教育』第156号 ,pp.45-51

曺英南（2000）「『けど』で終わる発話の語用論的研究 -『言い終わり』の『けど』を中心に-」『言語文化と日本語教育』第 19 号 ,pp.89-100
曺英南（2002）「韓国人日本語学習者における言いさし表現の習得研究 -OPI データを資料として -」『言語文化と日本語教育』第 24 号 ,pp.80-85
中山治（1985）「『ぼかし』の構造 - 日本語の表現心理」『月刊言語』第 12 号，pp.64-69
朴仙花（2008）「現代日本語における接続助詞で終わる言いさし表現について―『けど』『から』を中心に―」『言葉と文化』第 9 号 ,pp.253-270
朴仙花（2012）「中国人日本語学習者による文末表現の使用に関する考察：断り発話を事例として」『言葉と文化』第 13 号 ,pp.95-113
益岡隆志･田窪行則（1992）『基礎日本語文法―改訂版―』くろしお出版
松村瑞子（2001）「日本語の会話に見られる男女差」『比較社会文化』第 7 号 ,pp.69-75
水谷信子（1993）「『共話』から『対話』へ」『日本語学』第 12 号第 4 巻 ,pp.4-10
三原嘉子（1995）「接続助詞ケレドモの終助詞的用法に関する一考察」『横浜国立大学留学生センター紀要』第 2 号 ,pp.79-89
南不二男（1993）『現代日本語文法の輪郭』大修館書店
横森大輔・中川奈津子（2008）「けどの『文末用法』における二つのタパーンー特にイントネーションと会話連鎖に注目してー」『社会言語科学会第 21 回大会発表論集』,pp112-115
劉雅静（2003）「日本語における『言いさし』表現に関する考察―『発話機能』と『配慮』の分析を中心に―」『日本学研究』第 13 号 , pp.277-294

A Study on Unfinished Sentences Ending with “kedo”: Focusing on Gender Differences

JIE HE

Japanese is a language which is used differently by males and females. In Nihon Kokugo Daijiten (1980), the final particle is categorized as one of the elements which reflect gender difference, and has been studied as an attitudinal expression that reflects gender difference at the end of speakers’ utterance in previous research. However, the final particle “kedo” which is frequently used at the end of sentences is rarely studied.

Therefore, this research examines the natural conversation corpus of native Japanese speakers, and classifies the discourse function of "kedo" as "information provision" and "information request". In addition, this research also investigates the practical uses of “kedo” through the analysis of its discourse functions and contextual features. It has been found that male speakers use significantly more finite particles than female speakers, who tend to use more connective particles. Furthermore, it has also been found that there is a difference between males and females in terms of selecting “kedo” when stating opinions and thoughts, and inviting the listeners to identify with the speakers’ opinions.